



岡山の医療の在り方について考えたシンポジウム

患者と相互理解を

岡山で
県病院協 初の公開医療シンポ

県民と医療関係者と
の相互理解を目的とし
た初めての県民公開医
療シンポジウム(県病
院協会主催)が六日、
岡山市内のホテルで開
かれ、県内医療の在り
方について約二百五十
人が考えた。

NPO法人ささえあ
い医療人権センターC
OML(大阪市)の辻
本好子理事長が「良い
医療とは」と題して講
演。医師らに対し「治

療や入院など医療者に
とっては日常でも、患
者には非日常の事態で
あることをくみ取って
ほしい」と強調。医療
には限界があること
や、本人が治療方法を
決めるべきことなど患
者の意識改革も求め
た。

その上で「患者と医
療者の関係は恋愛のよ
うなもの」とたとえ、
信頼関係の構築には
「インフォームドコン

セント(十分な説明と
同意)を活用した双方
向の継続的な努力が重
要」と強調した。
シンポジウムでは、

金田病院の金田道弘理
事長が、医療機関や消
防本部が「顔の見える」
連携システムをつくる
ことなど救急医療の崩
壊を食い止めるための
「処方せん」を地域、
県、国に提案した。
県保健所長会の二宮
忠矢会長は、岡山市な

ど県南東部の医療機関
同士が脳卒中の治療で
連携するためのクリテ
ィカルパス(計画書)
活用に向けた取り組み
を紹介。山陽新聞社会
事業団の阪本文雄専務
理事は地域間の医療格
差是正を訴えた。
(河内慎太郎)